
靈魂！

花宮月弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈魂！

【Zマーク】

Z2122Y

【作者名】

花宮月弥

【あらすじ】

「幽靈ってほんとにいると思う?」
「んー……。

でも、『いる』って言つたら世界中大パニックになるよね

中学2年生の少女、鈴堂新菜とその“守護霊”、蒼柳。
どうしようもない凸凹コンビが世界を救つかも？

“靈魂使い”を名乗る人間たち。

“守護靈”を名乗る靈魂たち。

そして“悪靈”と呼ばれる靈魂。

ゆるゆるなラブ（？）アクション！

（ホラーというジャンルに入るのかもしません）

プロローグ（前書き）

ここにあはー。

花宮、はじめての投稿になります。

お世話を通じてくださいり、本物のありがとうございます。

「靈魂ー！」は、完全にわたしの好みの話となつてしましました。
でも、とても厚かましいお願ひではあります、最後までおつきあ
いいただけたら嬉しいです。

拙いながらも少しずつ頑張っていきたいと思います。
どうぞよろしくお願ひいたします。

プロローグ

【プロローグ】

クーラーは快適な温度を保つているはずなのだが、じつとつと汗をかいている。

「あ、あたしじゃなことよー。」

しかも、うすら寒い。

「（別に）二イナを隠つていいわけじゃない。この件に二イナが関わっているのだから、と言つていいのだ。）」

よく聞いていたこと聞き漏らしてしまった程、微かな声。わざやくようじて、心地よく響くはずの女の声は、今の新菜にとって恐怖でしかない。

事件は一昨日起つた。

ある男のルール違反を田撃した新菜は、すぐに口をつぶしてしまったが、できなかつたのだ。それは、その男と回罪だとこいつ」とを指す。

「（）……」

「（）（）イナは嘘が下手なのだから、隠す必要などない。何度もそう言わせるつもりだ？」

切れ長の鋭い眼光を放つ瞳が新菜を見据える。
新菜はあわあわ、と抵抗を試みたが、結局何もできずに、うなだれた。

「ソウリュウはたまに鋭すぎてイヤ。」

新菜の呟きを聞いて、蒼柳は笑みを深める。
新菜はふと顔を上げると、観念したようにバンザイした。

「ミシがやったんだよ、あの事件は。」

「（）（）……？）」

「そり、オオサキミシ。あたしと同じ学校の先輩で、あたしの直属の上司。」

でもね、事件を起してる時のミシは『やられてる』みたいな感じ
だったから、かわいそうで。」

大崎密はルール違反をするような男ではない。

正義感が強すぎる故に他の人と折り合いがつかず、最終的に新菜
とペアを組むことになつたという経緯まで持つ。

そんな男が簡単にルール違反をするだろうか。

「ま。バレちゃったんだから、ソウコロウモー一緒に考えてみね。」

「（無論だ。）」

黒田がちの大きな目をくしゃり、とじて笑つと蒼流もふつ、と笑い声をもらす。

「（私は）イナの“守護霊”だからな」

これは少女、鈴堂新菜 リンドウ＝イナ と、その“守護霊”、蒼柳の話である。

靈魂！

1話 お仕事（前書き）

説明がだらだらと続いてしまって、とても読みにくくなつてしましました。

長くなつたがなことを、一回だけ切るといつもった。

お詫びの顔があれば、『お詫びください』と喜こです。

1話 お仕事

靈魂使い。

そして、守護霊。

その存在がいつから出現していったのか。

それは定かではない。

しかし「全靈念」こと「全國靈魂協會」が発足したのは戦後すぐだ
った。

……らしい。

新菜はそびえ立つ古い洋館を、怪訝な顔で見上げた。

古ぼけた木製の立て札に、申し訳なさそうな字で 全國靈魂協會本
部 と書いてあつたり。

まったく手入れされてない庭は、カラスが住み着くほど深い雑木林
が出来上がっていたり。

そのせいで、建物に影が射して年中暗くジメジメした雰囲気をまと
っているという。

いつ見てもおどりおどりしここの場所。

新菜は軽くため息を吐いてから、鋸び付いた鉄製の、自分の身長の
2、3倍はあるつかといつ門に手をかけた。

全国靈魂協会本部。

それは、この国を見えない存在から救つために設立された、あまり陽の目を見ない組織である。

一応政府公認だが、それを掲げるわけでもなくひつそりと活動している。

しかし、仕事は結構な数入ってくるので、組織として成り立つているというわけだ。

なぜ、全靈会は大々的に活動しないのか。

それは、幽靈の類いが存在することを国が認めてしまえば、大きな混乱を招くことが予想されるからだ。

幽靈を信じていない人が多い中、わざわざ幽靈の存在を公表して「巻き込んで」しまうことをさけるため、全靈会でも「靈魂の存在を明かしてはならない」という掟があるくらいだ。

新菜は重い足取りで歩みを進める。

密のことが頭から離れない。

密は本当に良い人なのだ。

変なところもあるけれど、気配りができる、その上かなりの美男子で。

いや、Jリーグではカッコイイとか関係ないけど。

新菜はぐるぐると、そんなことを考えながらインター ホンを押した。

『はーい、Jリーグー全国靈魂協会本部でござりこまーす。』

「鶴さん、『J苦労様です。鈴堂です。』」

『はーい、J苦労様ー。今、靈魂用のプロテクト外しますねー。』

『

「お願いします。』

隣には蒼柳がいる。

悪靈の襲来を危惧して協会本部には強いプロテクトが施されているから、解除してもらわないと蒼柳だけ中には入れない。

「いつもここで時間食つちやつて『めんね。』

（何故謝る。気にすることでもないだろ？）』

「だって、ランクA以上の人なら自分でプロテクト解除ができるんだよ？」

「（別に。待つのは嫌いでない。気にするな。）』

ランク制度。

これはつい10年ほど前からはじまった制度で、依頼で殉職者をださないための工夫だ。

ランクは全部で6つある。

上のランクから命に関わる仕事を与えられることが増えていく。と、いうことは必然的に上のランクにいくほど、強い靈魂使いとい

う」ことになり。

S・A・B・C・D・Eとランクがあるうち、新菜はC。つまり新菜個人に与えられる仕事は悪霊とは関わりのない、「自爆霊との会話」レベルのものだけだ。

ぱつ、としない自分と蒼柳。

蒼柳は靈魂のランクでは最高を超越するS+であり、本来ならワクに見合った靈魂使いの守護霊になるのがベストなのに。

ふつと、体に感じていた抵抗がなくなりインター ホンから間延びした碧の声がした。

『一時的に解除しましたー。15秒後に再びプロテクトされるので、早めに入つてください。』

もちろん、碧の言葉を最後まで聞くことなく、新菜と蒼柳は屋敷の内部へと滑り込んだ。

鉄製の両開きのドアを開けると、クーラーの風が心地よく体にあたる。

ふつと視線をあげると、目の前に見慣れた女人の人があちこちと受付カウンターに座っていた。

「碧さん、こんにちは。」

「鈴堂一。ずーいぶんと久しぶりじゃないのー。」

「はい、すいません。」

「あらやだー。別に、責めてるわけじゃないのよー?」

受付嬢の有栖川碧はエキゾチックな美貌の持ち主で、年齢は不詳だ。
碧の横にはエキセントリックな格好をした守護靈が浮いている。

「ニールズさんもこんにちは。」

「（H A H A H A、コンニチハ！ソチラノカタモコンニチハ！）」

「（わ、私か？）」、こんにちは。」

生前、道化師だったらしい。

蒼柳はクールな顔を横に引き延ばして無理矢理笑顔を作った。

- - - -

協会内部は華やかだ。

中世の貴族の屋敷を連想させる造りになつていて、老若男女、色々な人たちが何かの手続きやら談笑やらをしている。

ここでは、周りがみんな靈魂使いだといふこともあって、人目を気にせずにつのびのびと出来る。

同じ理由で、離れにある協会の宿泊施設はいつも満員状態だ。

「あの、碧さん、ニシ来てませんか？」

「大崎くーん？ ああー、来てたと思つわよー？」

「ホントですか！ ありがと」「やれこまちー！」

瞬間、駆け出す。

傷むほど染められた金髪を探して。

「（待て、ニイナ。）」

その背にストップがかかる。

蒼柳を振り返った新菜は余裕のない顔をしていた。

「（だめだらう、闇雲にこのよつな広い建物の中を探しても。）」

はた、と止まつてあは、と笑う。

「やつだつた、やつだつたー！」

新菜はそつと目を閉じると、集中する。

気持ちを沈めると、密の少しづつ靈力を感じるのはよくなってきた。

そして暖かい、包み込むような密の靈力を、確かに察知した。

「感じた！ 2階のずっと奥。！」は…」

「（会長室、だな。）」

会長室にどうして密が？

やつぱりあのことがバレてしまつて…

血の気が引いた新菜は会長室を田指して駆け出す。
後ろから蒼柳が止めるのも聞かないで、弾丸の「」とく会長室に突入
した新菜は、息をつく間もなくまくし立てた。

「会長っ！」

ミツは確かに他の靈魂を殺してました！
だけど、とっても苦しそうだったんですね、すくなく苦しそうな顔をし
てたんです！

だから何か理由があると思うんですけど…

お願いします、ミツを処罰しないでください…！」

言い終わって肩で息をしていると、空氣がしらけていくことに気づ
く。

苦笑した会長、怪訝な顔をした会長の秘書・京子、そして呆けた顔
をした密と、それぞれ視線があつて新菜は混乱した。

「あれ？ あれれ？」

「鈴堂さん、ノックをしてから部屋に入るくらいの礼儀は最低限守つて頂けますか。」

「え、と。あの？」

「新菜ちゃん、ちょっと落ち着こうか。一いちらに来なさい。」

ピッシリしたダークスーツを身にまとい、髪をしつかり結いあげた上に黒ぶちメガネ、という出で立ちの京子に痛いほどの視線を浴びながら、新菜は会長の方へ歩いて行く。

密は確かに他の靈魂使いを殺していた。

靈魂の断末魔がまだ自分の頭の中に響いている。

あれは夢なんかじやなかつたはずで。

でも、ちょうど蒼柳とは離れていたから確証もなく。

新菜の頭の中は絡まりに絡まっていた。

「新菜ちゃん、まず新菜ちゃんが見たものを話しててくれるかな？」

心暖まる優しい声色の会長は、灰色の長髪を緩く横に流している。片眼鏡は女性的な美しさをもつ会長をより神秘的にしている。その微笑に、新菜は思わずぼーっとしてしまった。

「（お前の話を聞かせると言つてこる。 もうやめぬかー。）」

「うわ、あ、はい……」

命の靈魂、^{すい}帥に怒鳴られた新菜は我に返つて、姿勢を整える。帥は幼女のような姿をしているが、遙か彼方昔の靈魂で、その力は想像を絶する。

着ている服も平安貴族風であり、どこか他の靈魂とは違つたものを感じさせる。

新菜は帥に深く頭を下げてから、ぽつりぽつりと言葉を紡いだ。

「あの、一昨日、お仕事を頂いて自爆靈さんとお話してたんです。そしたら、路地にミツが入つていったのが見えて、何してるんだろうって思つたんですけど、自爆靈さんとのお話を続けたんです。でも、次の瞬間にすごい悲鳴が聞こえて、でも人間の声じゃないっていうのはなんとなくわかつて、急いで駆けつけたら、苦しい顔したミツが立つてて、そのあと靈魂殺しがあつたって言つから、それはミツなんじやないかつて思つたんです。」

新菜の説明に全員が深いため息をつく。密はしらけた目で新菜を見た。

「俺の隣にローザはいたか？」
「え、あ、見えなかつた。」
「ローザ、あの時俺の側にいたか？」

ふいつと視線をあげるとイブニングドレスをまとつたグラマーな靈

魂が、前髪をかき揚げながら答えた。

「（一）一ナの靈魂と一緒にだつたわよ。」

「靈魂なしで、じうやつて靈魂を殺すんだよ。」

「……ああ～。」

あの時、確かに靈魂同士でつもる話があるから、とこいついで、蒼柳もどこかへ行っていたのだ。

「じゃあ、ミシジヤないの……？」

「俺じやなくて悪かつたな。」

「本当に！？ 本当の本当？」

「しつこい。」

新菜は心が軽くなつて、その場で大泣きしてしまつた。
密はあわてて、なだめにかかる。

「いやあ、本当に微笑ましいね。新菜ちゃんは密くんを守りうとし
たんだね。」

「（ふむ。いいペアじゃないか。）」

密と新菜のペアは、学生同士のペアでなかなか舵取りが難しいのだ。
本分は学校でありつつ、協会にも籍をおいている一人は何よりも動
きづらい。

その中でよく、絆をつくれたものだと感心する。

それは密の誰より強い正義感と、新菜の素直さが織り成すことなのだろう。

朗らかな雰囲気にならつたその場に、京子の咳払いが響く。新菜は泣き止み、密はぐつと舌を縛まつた顔になり、会長は手を組んで笑顔を引っ込んだ。

「（失礼します……って何だ、この雰囲気？）」

今更入ってきた蒼柳は、田を丸くする。

そんな蒼柳に、会長は新菜の隣に行くよつて命じた。

「ちよつとい。蒼柳くんや新菜ちゃんもきいてもらいたい話だ。今田密くんに来てもらつたのも、この話をするためだつた。」

緊張が走る。

京子はカツカツ、ヒールを鳴らしながらアの側にたつと、誰にも聞かれないようにプロテクトをかけた。

「話どこの話は他でもない、靈魂殺害事件の話だよ。これは実は、前々からあつた話で新菜ちゃんが立ち合つてしまつた事件で正に20件目。

その事実を協会は隠してきたわけだけど、もつ隠しきれなくなつて

しまつた。」

「え、どうして隠してたんですか？」

「（よく考えてからものを言え、馬鹿者。協会に携わるもの全てが知つたら混乱になり、情報が尾びれつきで流出する。

そんなことになつたら、犯人は捕まりにくくなるだろ。）

「な、なるほど……」

「そう。でも、もう隠しきれない。

そこで状況が悪化する前に片付けてしまおうとしたんだ。」

会長の話はこうだ。

おととい、犯人を捕まえるべく、密がはぐれた靈魂の魂を察知して向かったところ、時既に遅く、大きな黒い塊が靈魂を食い殺していく最中だつたらしい。

犯人が人間だと思っていた密は靈魂相手に何もできず、ただ靈魂が喰われるのを見ていふことしか出来なかつた。

「危ない、それ、その変な黒いのにみつかつたら、ミツは殺されてた！」

叫ぶよつて言つて、新菜は蜜を睨んだ。

「普通ローザさんを連れていいくでしょー。」

「（あの時、密はあたしに気を使ってくれたんだ。
靈魂が集まる機会なんて、そんなにないからな。）」

「だつて、それで、もし」

あとは言葉が続かなかつた。
震える肩を押さえて、うつむく。

そんな新菜の肩に手を置いて、密はなだめるよつと囁いた。

「いめん、一ーナ。
もう絶対しない。」

新菜は人の命に過敏に反応する。
密の体温を感じて落ち着きを取り戻してきた新菜を横田に見つめ、
会長は話を続けた。

「今回、密くんにはちょっと危険な仕事をしてもいいんじゃない。
黒い靈魂の始末だ。」

「はつー？」

抗議しようとした新菜に、京子の主語靈 裸姿で後ろ
髪を一本に縛り、凛としたたずまいの女、が日本刀を突きつけた。

「（動いたら斬る）」

「声も出せなことついておきました。」

やつすずめの京子に苦笑しつつも、余韻は向も言わない。

「わかつてゐよ。そんな危険なこと、密にだけ任せたなって言った
いんでしょ？」

声の出せない新菜は首を思い切り縦にふった。

「ん。じゃあ、いじょうよ。

今回の任務は密くと新菜ちゃん、この一人が一緒にいる時にのみ
行ひことができる。
これでいい？」

何の文句もありません！

新菜は感謝の気持ちをこめて何度も頷いた。

向ひ見ずの新菜に、蒼柳も密も、思ひ思ひのため息を吐く。

ウラハク級の仕事をウラハクの新菜が引き受けた。

そんな大変な事態に気づいていないのは、新菜ただ一人だった。

第1話 終

1-話 お仕事（後書き）

最後まで読んでください、あつがといづるやこせしたー。

また、みひければよひじへお願いします。

おぬしきのぬしがあれば、『お描くださると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2122y/>

靈魂！

2011年11月9日16時07分発行